

「桜の花に魅せられて」



テーマ：「桜の花に魅せられて」

講師：島田恭子 陶芸家

会場：AGC スタジオ

日時：2013年6月6日（木）18:00～20:00

桜の模様の陶器と風呂先屏風がテーブルに置かれ、そして満開の桜の桜川市及び高峯のポスターが貼られた華やいだ空気が漂う雰囲気の中で、本人の自己紹介から講演が始まった。最近の町村合併で桜川市に名前が変わった茨城県の岩瀬町に生まれる。そこは「西の吉野、東の桜川」といわれ、山桜が多く、世阿弥作の謡曲「桜川」の舞台になった所でもある。御影石が多い土壌が山桜にあっていたのが種々様々な山桜が咲き誇るといふ。幼少時から目にしていたこの桜の景色が原風景となっている。

高校卒業後企業に勤めていたが、デパートで開催された陶芸展で益子の焼き物に感動し、翌週には益子を訪れる。帰路里山の犬羽に迷い込み、その土地に魅かれ益子に住む決心をする。弟子入りを志願したが、師からは「焼き物に入るは仏門に入るに等しい」と断られる。そこで益子に住み、職を益子に得て窯業指導所で陶芸を学ぶ。制作を重ね、日本橋高島屋で発表をするようになり、今年で14回目となった。その個展会場の光景が映像で放映された。作品の陶器の表面には桜の花はもとより、椿、牡丹、あやめ、つわぶき、くず、紫陽花、蓮、月とすすき、紅葉と四季折々の草花が美しく通常の壺とは異なる形状の陶器の上に描かれていた。月が多いのは月を毎日見る生活からきているという。桜といい月といい、日々それらを見ているからこそ、自然とモチーフになるのであろう。

窯業指導所の指導は1年で終了し、あとは独学で学び、「他に見かけない、ありそうでない」作品へと展開する。紐状の粘土を重ねていくという方法をとる。その場合1日に3段(3cm)しか重ねない。重ねてから表、裏ともに竹べらでしごき平らにして形を整える。それを毎日続ける。いくつかの作品を平行して作業するが、日数をかけて乾燥させることがひび割れを防ぐためにも重要である。乾燥には2～3ヶ月要する。陶

板も同じ方法で行なう。水分を抜いてから素焼き(600℃)をする。布目は素焼きをしてからつける。白化粧(白い粘土を施すこと)の際に布目をつける。さらに白粘土を重ねる。その後、布をほどよい湿り気を与えながらがす。その布目の上に釉薬の下絵の要領で絵を描く。その際、白化粧は生の粘土であるため下描きはしない。描画を施したあと、釉薬をかけ本焼き(1250℃)を行なう。金はその後に上絵の方法で行ない800℃で焼くが、液は黒っぽく描くのが難しい。下絵無しに、色もわかりにくい状況で描けるというのは余程描き込んでいるということであろう。

「自分の作りたいものを作り、自分らしいものを作る。売ればよい、ダメならしょうがない。大きな作品を焼いてこそ、ものが存在すると思ひ挑戦し続けている。自分以上でもなければ、自分以下でもない。」と、さわやかに聞き直っていた。

益子では江戸後期から生活雑器が焼かれていたが、浜田庄司、島岡達三等の天才が輩出し有名になる。現在は400名以上の作家がいる。一番大きな登り窯が東日本大震災でこわれ、他にも被害を受けた。現在は町づくりのために人を呼び込むという活動が盛んであるが、作家が直接販売に関わり、作る時間が少なくなり、焼き物に対するボリュームが低くなっている。焼き物の世界で生活をたてるのが厳しくなっていると益子の現状を案じていた。工夫、意匠をこらした真の手づくりの世界を大事にしたいものと思つた。

フォーラム委員 中野恵美子

